

平成30年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
- II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
- III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
- IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
- V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

学校名【 愛知県立豊田東高等学校 】

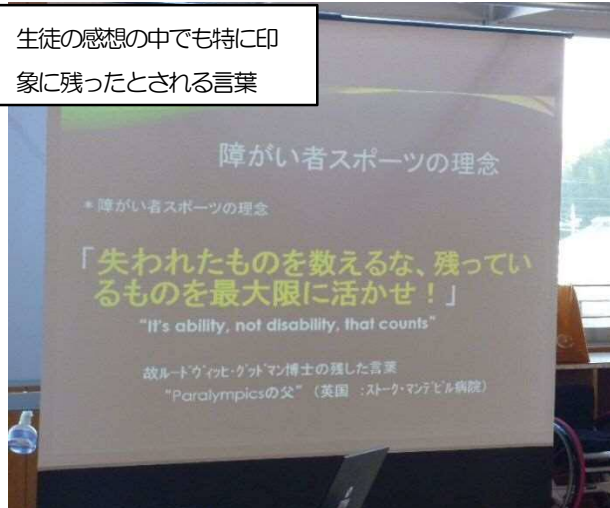
1 実践テーマ	【 I、III 】
2 実施対象者	愛知県立豊田東高等学校3年生 福祉プラン(3人)、看護プラン(22人)、保育プラン(22人)選択者 計47名
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名 (家庭・看護・福祉) ※ 合同授業として実施 ② 行事名 () ③ その他 () (2) 地域における活動 ① イベント名 () ② その他 ()
4 目標 (ねらい)	講話や実践を通して、障害者スポーツ及びパラリンピックに関する知識・理解を深めることをねらいとする。また、それぞれの障害の特性に応じてどのような支援やスポーツを行う上での工夫がされているかを知り、今後人と関わる仕事に就く上での学びに繋げていく。
5 取組内容	<p>【 外部講師への連絡 】</p> <p>事前に本講座の趣旨や目的を連絡した上で、講座内容の検討を行った。</p> <p>3プランの生徒は、普段は別々に各専門領域の授業を受けているため、障害やパラリンピックに関する知識に差がある。そのため、講座では障害についての基礎知識を説明していただいた上で、実技などの体験をさせて欲しいと伝えた。また、3プランの生徒は将来対人援助職に就くことを目指しているため、障害のある人との関わり方や援助者として求められる姿勢や心構えなどを話していただくようにした。</p> <p>【事前指導】</p> <p>各プラン生徒に対し、本講座の趣旨や目的を説明した。講師との事前の打ち合わせで、基礎知識について話していただくことになっていたため、生徒に対しては講座の内容についての事前学習は実施していない。</p> <p>【当日】</p> <p>愛知医療学院短期大学主催の出前講座を活用した。当日は上記大学から講師の方（1名）にお越しいただき、2コマの授業時間の中で体験や講話を行っていただいた。</p> <p>1 限目：講話 「障がいとは何か」、障がい者スポーツの概要・理念、パラリンピックについてなどスライドや映像を用いて説明</p>

	<p>2 限目：実技 アイマスクによる視覚障害者の歩行体験・誘導の仕方、競技用車いすの体験を実施した。</p> <p>【事後指導】 本講座を受講した感想を記入させた。しかし、その後は各プランの授業の関係で、十分な振り返りを行うことができず、感想を書かせただけで終わってしまった。感想用紙は講師に郵送した。</p>
<p>6 主な成果</p>	<p>一部の生徒はプランや自由選択科目の中で障がいや障がい者スポーツについて学習をしていたが、多くの生徒は全く知識がない状態での受講となった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障がい（障がい者）のイメージの変化 生徒の感想の中で多くあったのが、「障がい者はできないことが多く、助けてあげなければいけない存在だと思っていた。しかし、今回の講座を通して障がいのある人でもできることはたくさんあって、周りの人達は障がいのある人達が暮らしやすいように工夫したり、必要な時に力を貸してあげれば良いことがわかった」という内容のものである。『障がい（障がい者）＝不便、可哀想、助けなければいけない』などマイナスなイメージを多くもっていた生徒がこの講座を受けたことで、障がい者の可能性や自分たちにできることは何かを考えるきっかけとなった。 ・多様な視点で相手を見ることや支援を考えることの大切さに気付くきっかけとなった。 講話の中で紹介された「失ったものを数えるな。残っているものを最大限に活かせ」という言葉は、多くの生徒の心に響くものだった。生徒たちが目指す職種では、今後さまざまなニーズをもつ人々と出会うことになるだろう。その際に、障がいなど目に見えるものだけでその人自身や支援を判断するのではなく、残されているものやその人のもっている可能性など多様な視点で個々を見ていくことの必要性・大切さを学ぶことができたようである。 <p>今回学んだ内容や援助職として求められている姿勢・考え方などを今後のそれぞれの進路実現に生かしてくれることを期待したい。</p>
<p>7 実践において工夫した点（事業の特色）</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・実際に障がい者スポーツの体験ができるように、講座の場所や生徒の服装を工夫した。 ・前半に講話、後半に実技を実施することで 2 時間の講座にメリハリをもたせた。また、障がいについて概要を知ってから実技を行うことで、ただの「体験」だけにならないように注意した。 ・準備や当日の運営を担当者だけでなく、体育科にも協力してもらいながら行うことで、他教科や学校全体にもこの取組の趣旨を理解してもらい、次年度に繋がるようにした。 ・将来対人援助職に就くことを目指す生徒に対し、社会には障がいを含めさまざまなニーズを抱える人がいること、そのような人に対し専門職はどのように関わるべきかを考えながら受講するよう指導した。
<p>8 主な課題等</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・事前事後学習の不足 本校は総合学科であるため、時間割を変更・調整することが難しい。今回の事業展開が年度途中だったため、対象生徒の授業時間を同一時限で確保することが困難で事前事後学習の時間を十分とることができなかった。次年度以降、本年度と同様にこの事業を行っていくためには、年度当初の計画案に組み込み、十分な学習時間を確保することが必要となる。
<p>9 来年度以降の実施予定</p>	<p>オリンピック・パラリンピック教育だけに限らず、障がいについてや支援を必要としている人々との関わり方などの授業は、今後さらに多様化していく現代において必要なものだと考える。今回は3年生の一部の生徒を対象としたが、可能であれば後は学年単位や学校全体で実施したいと思う。</p>

前半 障がいについての講話
(武道場にてスライドを用いて説明)



生徒の感想の中でも特に印象に残ったとされる言葉



視覚障害者の
マラソンの誘
導支援を体験



競技用い
すの説明&
乗車・走行体



代表生徒から講師へ
お礼の言葉



資料が借りられ、一生懸
命メモをしていました

